〔先哲叢談八〕秋山儀、字子羽、紀平洲小語曰、○中略子羽、外柔內剛、有親友作髑髏杯者、諸客皆擧、獨子羽不敢飲、作詩諷之、

〔風俗醉茶夜談後八器財〕いま東都太平の御代にうまれて、聖朝の德化に浴する人のうちにも、忍ならぬものずきする事を、風雅とおぼべたともがらには、人の頭髏もてさかづきにつくれるめくらもあり、かのめくらは、唐詩選のこうしやくする事、仕おぼへたれば、月氏頭にのむといふ詩の語をきゝかじりて、かまくらへゆきける折から、屏風が谷にうづもれたる、北條家の髏骨をひろひきて、きんはくもて、これを裝嚴し、或る大諸侯さまのやかたへもちゆきて、かの諸侯さまをせこめ奉りて、髑髏杯の酒をすゝめたる時、諸侯さまにも、さすがに寬仁大度の御氣象にて、めくらがこゝろに、さからひ玉はで、その酒のみ玉ふたれども、めくらが異をこのむに、あきれおはしたるよし、その侯の家につかふる、同學の秋山それがし、かたりきかせ侍りぬ、

介貝盃

〔天文本倭名類聚抄五龜貝〕錦貝　辨色立成云、錦貝、夜久乃斑貝、今案所謂爲盃之紅螺是也、

〔爾雅十釋魚〕蠃小者蛤註螺大者如斗、出日南漲海中、可以爲酒杯、○下略

〔本草綱目啓蒙四十二蚌蛤〕海蠃

青螺ハヤクガヒ、薩州夜久島ノ產ナリ、故ニ名ク、誤リテ夜光ト云フ、形紅螺ニ似テ、厚大ニシテ微扁シ、外色灰白、內ハ銀色ニシテ、翠紫ヲ帶テ珠色ノ如シ、外皮ヲ刮リ去ルトキハ珠色ヲ現ズ、工人斜ニ切テ酒杯トス、夜光ト云フ、

〔枕草子七〕くぎやう殿上人は、かはるゝ盃とりて、はてにはやくがひといふ物、おのこなどのせんだに、うたてあるを、御前に女ぞ出でとりける、

〔壒囊抄一〕明衡往來ニ泛羽觴トアルハ何事ゾ　是酒器名也、羽トハ鳥也、觴ハサカツキ也、禮記ニモ提觴捕蟹之行專蘊胸中トヨメリ、譬ヘバ鳥形ヲ作テ羽ニ觴ヲ居ル也、其付テ鸚鵡酒ヲ好ム故